

## 平らな深み、緩やかな時間

1992年 同名の小川真澄・米満泰彦とのグループ展(真木画廊)テキスト

「絵画とは平らな深みであり、そこには緩やかな時間が流れている。いま絵画について考えてみると、それ以上のことも、以下のことも言えないのではないか。」

そんな思いが私の中にあるのですが、その思いは混沌としていて、明確な形をとろうとしません。例えば此処でいう「平らな」というのは、見た感じが「平」であるということで、物理的に厳密な意味で「平面」であることではありません。

このように言う時、私は例えば F.ステラの作品の変容を想起しているのですが、ステラの作品がミニマルアートから表現主義的様式(?)へと移行したというような事は実にやかに語られているわけですが、私はそういうことよりも、ステラの作品形態が平面からレリーフ状になり、さらに壁に掛けられた巨大なオブジェのような様相を呈しているのにも関わらず、その作品が圧倒的に絵画然としていることに興味を引かれるのです。

その事は平面、立体、オブジェなどといった便宜的な美術作品の区分とは違い、絵画という概念がいかに関念の奥深くに根をおろしているのかを、示しているように思います。つまり作品が物理的に平面であることと、それが絵画的であることとは別なことなのであって、例えばステラの作品にしても、その初期の平面であった作品群の方が後年の立体的な作品群よりも、絵画の彼岸を危うく漂っていたという事実によって改められて震撼させられるのです。絵画という概念は「平らな」という大雑把な感じの中で、形態の概念としては膨張もすれば縮小もする、極めて捉えどころのないものなのです。

さらに「絵画」と呼ばれるものの成り立ちを考えてみるなら、それは私たちの観念の奥深くにあるものが、私たちの視線を辿って或る物体(「絵画」と呼ばれるもの)の上に照射される時に起こる一つの出来事である、と言っては観念的に過ぎるでしょうか。しかし、その一連の出来事の中で私たちは実際の視線の先の物体にはないような奥行きや広がり、動感(静止感)、重さ(軽さ)を感じるわけで、そのような絵画の作用、絵画的な出来事は鏡面のように静かで「平らな」水面に手を入れた時に感じる思いがけない「深み」の感覚のように或る種自己矛盾にも似た出来事であると思うのです。

そしてその矛盾的な「平らな深み」の中には、当然のことながら独自の「時間」が流れているのですが、その時間は私たちが日常生活の中で感じているデジタルで整合性のある時間ではなく、矛盾と「緩やかさ」を同時に持つ時間であると思うのです。

例えばジャクソン・ポロックのアクションペインティングを想起してみます。ポロックのアクションペインティングはアクションであると同時に、そのアクションの軌跡である塗料の痕跡が画面上で別の時間を獲得します。その時間はポロックのアクションのスピー

ド感とは裏腹な、静寂に満ちた時間であるようにも感じられるのですが、それが絵画特有の時間の表象の一つの形であるわけです。それと反対の例を挙げるなら、たまたま私が見た作品の中でロバート・ライマンという作家の白いペインティングの作品があるのですが、その作品は支持体である紙と白い塗料とライマンの行為の軌跡である刷毛の痕跡が、まさに等身大で見えるわけですから、絵画特有の「平らな深み」も獲得されず、「緩やかな時間」も生じていなかったのです。現在においては奥行きと呼ばれるような旧套的な絵画空間には、既にスリリングな仕事の展開が期待できないのも事実ですが、たとえ絵画の表面に限りなく近い位置で仕事をするのであっても、そこに表象される空間が重層性を持っていたり、震えたり、広がったりするのでなければ、その表現としての意味合いはどこに生じるのでしょうか。

しかしこの場合、どちらかと言えば空間の問題として考えるよりは、むしろ行為性と時間性の問題として考えるべきであろう、とふと思いました。絵画と対峙した時に見える行為性というものは、やはり等身大であっては意味がないのであって、どんな行為による絵画との接触であっても、それは日常的な時間から絵画という場に一度投げ出されるべきものなのではないか、その結果絵画特有の「緩やかな時間」が生じてくるのではないか、そこに表象される時空間は必然的に「深み」のようなものを持っているのではないか、などと芋づる式に考えてみたのです。

現代に仕事をする私たちは、それらの連鎖に感性を開くことでポロックよりもさらに遡り、セザンヌまで見通せるのではないだろうか、日本という特異な島国でのその営みは、どのような結末に至るのだろう、と考えてみたりするのです。